

## はしがき

世界の動きや日本の政治、社会の諸問題について、自分なりに考え、一定の見解をもつこと、それが私たち「市民」1人ひとりに欠かせないものだと思います。テレビでキャスターあるいはコメンテータなどが語る内容に「共感」したり「反発」したりするだけでは、自分の意見を語ったことにはならないからです。また、基本的なことを曖昧にしたままで、もっともらしく語られることばに「喝采」するだけの「民主主義」は、日本国憲法によって立つ立憲主義、そのもとで制度化された「民主主義」とは相容れないものだと思います。でも、自分なりの考えを持つためには、人類がこれまでに築きあげてきた学問の基本的な成果をキチンと学び、批判的に受け継いでいくことが必要です。

本書は、憲法の「入門書」です。憲法を大学などで初めて専門的に学ぶときの「教科書」とも考えています。したがって、憲法学の「各テーマの論点や知識」はまず確実に身につけてもらいたいと思っています。「教科書」っていうと「読まされるもの」、「書いてあることを覚えるもの」って思っていませんか。編者は、本書を読むほどに味わいが出る、関心を深めれば深めるほどそれに応えてくれるものにしたと考えました。また、あまり書物を読まないといわれる層にも、手にとって欲しい、読んでほしいという想いが強くあります。そこで、本書は、できるだけ「面白いもの」にしたと思っています。

ここでいう「面白い」とはその本来の意味でのものです。「面白い」の古語は、「おもしろし」で、目の前が白く開け、心が晴れ晴れする感じを表すとされていましたが、それが原義となって「興味深い」、「楽しくて夢中になる」などの意味を持つ言葉となっていったようです。これらの意味のなかでは、「原義＋興味深い」というのが、本書がめざす「面白い」に近いようです。さらには、「楽しくて夢中になる」となった読者が1人でも出れば、著者冥利につきますということでしょうか。

さて、上述の「面白さ」を出すため、本書がちょっとした工夫をこらしたとすれば、読者層の時代にできるだけ各執筆者がタイムスリップし、その年代の「気持ち」を思い出しながら執筆したこと、それを可能にするための舞台設定

として「憲法ゼミナール演習」のクラスを設け、各執筆者は、ゼミ生としての報告をおこなうという構成をとったことです。この構成は、編者(孝忠)の学部、大学院のゼミ、研究プロジェクト、そして自主的な研究会にかかわった研究者による執筆陣によって可能になりました。彼らは、憲法学を学び、ワインをともに飲み、そしてパンを分け合い、良い意味でのライバル意識を持ちながら研究者として育っていった憲法学の「同志」でもあります。

本書の各章本文では、憲法学の基本的な課題、争点は、ゼミ生の報告として書かれています。そして、その報告にたいする質疑応答がおこなわれる『ゼミ風景』のなかで、「なぜ」そう考えられるのか(そう考えられないのか)、「なぜ」そのような制度となっているのか(なっていないのか)という問題意識を出し合い、憲法理論、学説、判例などの紹介、検討を深めてみたいと思います。さらに、『After 5ゼミ』の中では、諸外国の憲法、政治・社会の断片がとりとめもなく語られるでしょう(といっても紙数の関係でかなりカットされています)。

上述の趣旨をふまえ、各執筆者は、それぞれ仮想のキャラクターを有する「ゼミ生」として登場します。それぞれの執筆者とこの「ゼミ生」の性格は、虚実入り混じったものです。作品としての完成度があるかどうかは、皆さんの判断によるところなのですが…。

それでは、まずゼミ生を「紹介」しておきます。

※ ※ ※ ※ ※

(山鹿) 論議に入る前に、みなさん、簡単に自己紹介をしていただけますか。ええーっと、私の右から、<sup>ながくま</sup>長熊くんでしたね。

(長熊) 「ながくま」です。ご覧の通り、名は体を表してはいませんが…。奈良の出身です。趣味はクラシック音楽鑑賞です。なんでも聞いてください(ただし、途中で僕の<sup>うんちくぼなし</sup>蘊蓄話の腰を折らないでくださいね)。お酒は日本酒が好きです。というか、うるさいほうだと思います。普段はどちらかといえば無口な方ですが、妙なところでムクムクと正義感が湧いて(沸いて)くるところがあります。

(鶴巻) 「つるまき」です。北海道の出身です。山歩きやお城めぐりが好きです。不審者と間違われるときもありますが、文化財の真摯な探求者です。食べもの・飲みものなら何でも挑戦してみたいと思います(このゼミを選んだ理由の1つで

す)。のんびりしているように見られますが、周りの空気が読めないタイプですし、妙に細かいところがあります。

(羽生)「はぶ」です。沖縄出身です。観るだけですが野球が好きです。甘党ですが、泡盛も嗜みます。ちょっとミーハー的な趣味があるとも言われますね(僕自身は、最新の芸術動向に不断の関心を抱いているだけだと思っているのですが)。発言内容と言い方などから強気に見られますが、打たれ弱く、くよくよ悩むところがあります。いわゆる「反中央派」、かつ「護憲派」です。

(梟)「ふくろう」です。ちょっと珍しい苗字なので印象に残るのか、すぐに覚えてもらえます。東京出身です。陸上(走るほう)をしていました。今は、テニスをしています。子どものころに舐めた(飲んだのではありません)、薬草のようなウイスキー味が忘れられず、いまではシングル・モルト派です。熱くなりやすく、直情的なところがあり、いわゆる「体育会系」といわれたりします。(乾)「いぬい」です。神戸出身です。ジャズが好きです(幾つかチャレンジしてみましたが、演奏はできません)。小学校まで海外にいました。リベラル派を自称していますが、「愛国心?」は強いような気もします。協調性に欠けるところがあるといわれたこともあります。結構、新しもの好きです。将来はIT業界を目指しています。

(時導)「ときどう」です。大阪出身です。音楽が好きです。自分の感性に合うものであればジャンルを問いません。食べものに対してもこの姿勢は共通しています。態度や発言は結構大胆に見えるので、誤解を招くことも多いのですが、自分では、かなり「論理的」であり、繊細で神経質だと思っています。

※ ※ ※ ※ ※

それでは、彼らがどのような報告をし、論議をしてくれるのか、各章をじっくりとお読みください。

2014年3月

編者を代表して <sup>やまが</sup>山鹿こと 孝忠延夫